

民話・夜話・童謡における”地下”みてあるき

SOME UNDERGROUND WORLDS IN FOLKTALES, ANCIENT ESSAYS AND CHILDREN'S SONGS

後藤恵之輔*

Keinosuke GOTOH

In this article the author describes some underground worlds that were tried to find in folktales, ancient essays and children's songs in Japan. The folktales referred to were 1506 ones in which 11 stories were related to underground worlds. Some of them were "A mysterious cave", "Oniemon in a rock cave" and "A hot spring from a tunnel". The ancient essays referred to were written by Mr. Seizan Matsuura who was the lord of the Hirado clan. One of essays related to an underground world was a story in which an earthquake was not felt in caves of the Sado gold mine. In children's songs no one was found about an underground world.

1. まえがき

昔の人は、地下とどうつきあっていたのであろうか。彼らと地下との結びつきは、生活および鉱山などの産業をとおしてであろう。前者には例えば地震があり、地震は地下のなまずが騒いで起こると思っていた。後者の例は佐渡の金山がそうである。

著者は、昔の人々と地下との触れ合いを、民話（昔話）、夜話、童謡に見ることができると考える。本論では、民話として”県別ふるさとの民話集”（偕成社）、夜話として松浦静山の”甲子夜話”、童謡として”わらべうた～日本の伝承童謡～”（岩波文庫）をそれぞれ取り上げ、地下関係の話、童謡を調べて、昔の人の地下とのつきあいを概観するものである。

2. 民話に見る地下世界

ここに”県別ふるさとの民話集”（偕成社、全47巻）¹⁾がある。この民話集は、日本児童文学者協会が全国の協会員と民話研究者の協力を得て、9年の歳月を要して完成したものである。全巻合わせて、伝説975話、昔話350話、現代民話181話、計1506話という膨大な数の民話が、県別に再話されている。

1506話中、地下に係る民話は決して多くない。民話の題名のみからそれらを拾えば、概略以下のとおりである。

なぞのどうくつ（北海道）、ミミズとヘビ（東京都）、モグラさうどう（静岡県）、
トンネルからでた温泉（福井県）、戸隠の鬼女（長野県）、ほらあなの声（岐阜県）、
逢坂山トンネルの怪（滋賀県）、関門トンネルと惣の話（山口県）、岩穴鬼右衛門
（山口県）、別子銅山のてんぐ（愛媛県）、青の洞門（大分県）

* 正会員 長崎大学教授 工学部社会開発工学科

このように、再話されている地下関係の民話は、地下と言えども洞窟、岩穴、トンネル、ないし地表面のごく浅い所の話である。これらの内から3話を示そう。

2.1 なぞのどうくつ²⁾

”小樽の手宮ちゅうところに、ふるいふるいどうくつが、ひとつある。そのどうくつにはな、なん千年もむかしに、日本人でない、どっかの国の人間がすんでいたんだとよ。うん、しょうこは、ちゃんとあるんだ。そのことは、まあ、あとではなすべえ。”が、話の切り出しである。

この洞窟を最初に発見したのは石屋の長兵衛である。手宮の山へ石を探しに行ったあるとき、地面が抜け落ちて、彼は穴の底に落ちてしまった。その洞穴の最奥の壁に、字か絵か分からないものがあった。長兵衛はこのことを村人に触れ歩いたが、誰も信じてくれない。ところが、この話を伝え聞いた北海道開拓使・榎本武揚が、この洞穴にやってきて壁に描いてあるものを写し取り、東京の大学の研究室へ送った。

やがてジョン・ミルン博士がやってき、ミルンも同様に写し取って帰っていった。ミルンが言うには、壁に描いてあるものは字で、しかも北ヨーロッパの古代文字で突けつ語で書いてあるのではと。そう言えば、日本の歴史の本にもく紀元660年に阿部比羅夫が、北の国からやってきた肅慎（みしはせ）を討った。>とある。この肅慎人もミルン博士の言う突けつ人というのも、同じ北ヨーロッパ人だから、突けつ人にしたって北海道へやってきたかもしれない。こんなことがあってから、日本の学者たちはこの洞穴の文字について、いろいろな読み方をしている。

”だもんで、いつから、どっから、どんなやつがやってきて、ほんとは、なにばかいたつもりなんだか、なんともはや、わかんねえんだ。だからな、このほらあなは、いまでもくなぞのどうくつ>といわれて、ちゃんと保存されているんだ。”で、話は終わっている。

本民話集の解説³⁾によれば、突けつという国は6世紀の頃、中国のアルタイ山脈の麓一帯、蒙古（今のモンゴル）を中心に遊牧国家をつくっていた。肅慎は、この突けつが分裂してできた国だとも言う。したがって、突けつ人が間宮海峡を渡って北海道に来たとしても不思議ではない。

著者は、この民話の中に、阿部比羅夫、榎本武揚、ミルンという我々にとって馴染み深い名前や、突けつ人、肅慎人といった今まで聞いたことのない国の人が出てくることに、関心をひかれる。”なぞのどうくつ”の実際と、その後を知りたいものである。

2.2 岩穴鬼右衛門⁴⁾

昔、深川（今の長門市）の江良の百姓たちは、毎年水不足に悩まされていた。それというのも、川上の殿台の百姓たちは音信川をせきとめて、たつぷりと田に水を引いているというのに、殿台と江良の間に長さが160間（約300m）もある岩山が居座っているために、その水を江良まで引くことができなかったからである。そこで、村内の久助という男が鬼のような執念で岩穴を掘り続け、ついに掘り抜いてしまった。それからというもの、村人たちは久助のことをく岩穴鬼右衛門>と讃えて、子や孫に語り継いだ。この話はその伝説である。

上流から水を引くため、江良の百姓たちは仕方なく、音信川の川岸の岩壁に長い箱樋を綱で吊って水を通していった。しかし、1年も経つと、綱が腐って箱樋が落ちてしまう。おかげで、田植えが近づくと毎年、箱樋を作り直さねばならなかった。更に、苦勞して箱樋をかけても、水は少ししか流せず、また途中で漏れてしまう。

ある年、箱樋づくりに集まった村人たちに、久助は皆で力を出し合って岩山に穴をくりぬこうと提案した。しかし、誰も相手にしてくれない。久助はたった一人で岩山に立ち向かった。彼には年老いた母と女房があった。岩穴掘りに打ち込んだ彼は、全く家の仕事をしなくなったため、二人は女手だけで野良仕事をしなければならなかった。元もと、貧乏百姓だったのに、暮らしは苦しくなるばかりである。その上、硬い岩山を掘るのだから、鑿はすぐに駄目になる。鑿を焼き直してもらうために、鍛冶屋へ払う金も馬鹿にならなかった。

穴掘りはなかなか捗らなかったが、それでも1年経つと、ようやく久助の体が隠れるほどに掘れた。更に2年、3年と月日が経った。その頃になると、村人たちの中には、岩穴の入り口に毎日にぎりめしを置いていく者が出てきた。また、鍛冶屋はただで鑿を焼き直してくれた。そして5年目の春、ついに岩穴は貫通した。江

良の村人たちは一人残らず岩穴へ駆けつけ、久助の手を取り合って喜びの声を上げた。村人は相談して、わずか数十日で立派な水路をつくりあげた。初めてこの水路に水を通した日、江良の百姓たちの喜びと久助に感謝する声は、音信川の水音より高かったという。

著者は、久助の岩山との闘いと成功に、シビル・エンジニアリングの神髄を見る（久助は土木技術者ではないが）。久助は文政13年（1830年）10月、83才で死んだという。久助に思いを馳せながら、今の江良の地を訪ねたいのが著者の願いである。

2.3 トンネルからでた温泉⁵⁾

この話は、昔のいわれと北陸トンネルの工事が係わる現代民話である。北陸トンネルは敦賀と今庄の間にある木ノ芽峠の下を通っているが、この峠にはくいうな地蔵>という地蔵がある。名前の由来は、昔ある巡礼が地蔵さんの”お前も言うなよ。”の戒めを破ったばかりに、とうとう殺されてしまったことから来ている。

木ノ芽峠は小さいが急な峠で、昔はこの峠を越えるのに大変難儀をした。そこで、峠の麓の宿には馬子がたむろして、足の弱い人や金持ちの客を馬に乗せ、この峠を越えた。ある朝、一人の馬子が金沢から京へ帰るといふ商人を馬に乗せて、峠を登っていった。しかし、借金取りに責め立てられていたその馬子は、商人を殺して金を奪ってしまった。殺した後我に帰った馬子は、あわてて辺りを見回した。地蔵がぽつんと立っていた。馬子は地蔵に、”このことを誰にも言わないで下さい。許して下さい。”と何度も祈った。すると、ふいに地蔵が口を開いた。”わしは言わぬ。お前も言うなよ。”と。この日から、その馬子の姿は木ノ芽峠から消えてしまった。

それから10数年後。一人の巡礼と若者が宿場で知り合い、道連れになって木ノ芽峠を登ってきた。巡礼は峠の上の地蔵に、長いこと真剣に拝んだ。若者はその姿を見て、訳を聞いた。巡礼はやがて、自分が10数年前ここで殺人したことを、商人の様子を交えながら詳しく話した（地蔵の戒めを破って）。とたんに若者は短刀を取り出し、巡礼に切り付けた。この若者こそ、あの商人の息子だったのである。こうして巡礼はとうとう仇を討たれてしまった。このことが知れわたると、峠の地蔵はそれからくいうな（言奈）地蔵>と呼ばれる様になったという。

それから何百年も後の昭和36年のこと。くいうな地蔵>のある木ノ芽峠の下を北陸トンネルが走ることになった。ところが、この工事中、突然トンネルの中から温泉が噴き出すという事件が起きた。喜んだ敦賀市の人たちは、このことを内緒にしていたが、この辺りの土地は既に京都や大阪の観光業者に買い取られていることが分かった。その上、その観光業者たちは、トンネル工事をしている国鉄と交渉して、温泉の使用権も手に入れているという。

地元の人たちは、”一体、誰が温泉のことをしゃべったんだ。””あんなに内緒にしとこうと約束したのに。”と悔しがった。すると、中の一人が言った。”言うな、言うなといったって、つい言っちゃまうはずさ。この峠はくいうな地蔵>の峠だもの。あの昔話の巡礼のように、誰かがぼろっと言っちゃまったのさ。”（後略）。

今、敦賀駅のホームに立って南側を眺めると、田圃の向こうの山麓に温泉旅館が立ち並び、”敦賀トンネル温泉”の看板が立っているという。著者は是非ともこの峠に登り、トンネル温泉に入って湯の滝に打たれてみたい。

3. 夜話に見る地下世界

松浦 清（静山）は平戸藩主である。彼は当時あった多くの話を、甲子夜話（正篇）⁶⁾と同続編⁷⁾に残している。地下関係の話はほとんどないが、ここでは2話を紹介することとする。

3.1 穴中地震することなき話⁸⁾

原文を示す。”佐渡の金堀穴深きことは前に云たり。その後に聞く。此穴の奥く地震することなしと。然に彼国は、余国と同く地震するなり。俗情を以て考れば、地底ほど地震すべきやうなれども、地は厚きもの故、下ほど実する理なれば、地震せざるか。洋説ますます当たれり。（後略）。”

文頭にある佐渡の金堀穴云々は、同巻に佐州金山の奇事⁹⁾として”佐渡の金穴、地中に堀下ること凡十四五里程なり。（中略）計るに海底に入ること尤深く、又其奥は、越後の地方の地底に堀及ぶべき里程なりと。”とあるのを受けている。

この話は大変興味深い。今日の我々は、地震動が地下深くなるにつれて急減することをよく承知している。それは地震動の記録が多くとられ、またその情報に触れる機会が多いからである。しかし、昔は地震計とて勿論なく、地震の揺れを地上と地下とで比較することも極めて稀であつたろう。この話があるのは、佐渡金山で働く人たちの間で、”今日、地震があつたが、お前感じたか。”（地上勤務者）、”いや、全然感じなかったぞ。”（地下勤務者）の会話が幾度か交わされ、それが静山公の耳に達したものと推測される。

ところで、佐渡には地震はあるのだろうか。これがはっきりしなければ、上記の推測もあてずっぽうになってしまう。著者としては、佐渡の地震のことを調べ、佐渡における地震の記録、さらには佐渡を含む各地での地震計による地震動記録とこの夜話とを照らし合わせてみたい。小事ではあるが、話中の彼国とはどこであろう。オランダと思われるが、そうだとすれば、オランダで地震は起こるのだろうか。また洋説とは何か、思いはいろいろと馳せる。

3.2 地底の寺顕る¹⁰⁾

原文は以下のとおりである。”寛政四年四月朔日、肥前島原の城外温泉嶽、俄に裂崩て、城下の人数百を圧没す。このとき海向の肥後領、遥に相對せし方二十里ばかりの程、津波の為に民居人家尽く漂散し、或は汀砂に埋れたり。此時最奇なりしは、海岸の上にありし

一寺（名今不詳）、海一によって漂没せしが、其辺の喬松二三樹も又倒れ、一一て寺屋に覆ひたるに、汀砂これが上に積て岡をなせり。此ごとくして二十余日を経ふ。然るに後この辺を往者、地底に鐘響の幽なるを聞く。人訝りて、その地を掘ること丈余にして、遂に屋背を見る。やや掘るに、寺屋松樹の下に在て、僧輩つづがなし。因免ることを得たりと。奇と云べし。抑亦仏助か。このこと肥後侯（細川氏）の菩提所、竜田山泰勝寺の住持その翌年の直話なりと。印宗語る。”

この話は、寛政4年（1792年）のいわゆる”島原大変、肥後迷惑”に関連する話である。同年4月1日（新5月21日）、島原城の背後にある眉山が大崩壊を起こし、崩れ落ちた土砂で麓にあった島原城下と安徳村他を埋め尽くしただけでなく、土砂が島原湾に突入して計3波の津波を発生させ、島原側と対岸の熊本側にも甚大な被害を与えた。このとき死亡した人数は¹¹⁾、最も信憑性のある記録によれば14920人であり、その内訳は島原半島島原領で死者9924人、有明海を隔てた天草郡では溺死者が343人を生じ、さらに熊本領の流死は4653人であった。

寛政四年島原地変記による熊本領の被害状況のうち、流出寺は1カ所とある。飽田郡船津村蓮光寺では、庫裏の堅固なことを過信して2階に上がっていた人々が皆流死し、直径5m以上もの大石も流出した。甲子夜話に出てくる上記の寺は、この蓮光寺ではなかったか。ちなみに、当時の津波の高さを推定すれば、熊本市滑田で23.4m、三角町太田尾で22.5mであったという¹¹⁾。

4. 童謡に見る地下世界

”わらべうた～日本の伝承童謡～”（岩波文庫）¹²⁾は、我が国の現存わらべうたのなかから伝承童謡（自然童謡）として、もっとも代表的と思われる曲、約160篇を集成し、これに必要な解説と注解を加え、曲譜の全部を掲載したものである。採集地域は北海東北地方から、九州地方・沖縄諸島にまで及んでいる。

曲の配列は、おおむね歌柄別により、遊戯唄その一・子守唄・天体気象の唄・動物植物の唄・歳事唄・遊戯唄その二の6種に分かれている。遊戯唄その一は、主として手毬唄・お手玉唄・羽根突唄など玩具を以てする

遊び唄で、その二は縄跳び・隠れんぼ・鬼遊び・手合わせ遊び等、主として集合遊戯に関する遊び唄である。

代表的な唄をいくつか示そう。遊戯唄その一：山寺の和尚さん、あんた方何処さ（これらを含めて計59曲）、子守唄：坊やはよい子だ、守り子守さ（同24曲）、天体気象の唄：風風あがれ、雪やコンコン（同22曲）、動物植物の唄：雀ど雀ど、ホーホー螢こい（同21曲）、歳事唄：お正月がござった、盆ならさん（同16曲）、遊戯唄その二：花いちもんめ、かごめかごめ（同28曲）。

これら合計170曲を一曲ずつ曲譜を詳細に調べたが、地下に関係するわらべうたは一つとして見当たらなかった。同書において曲種の選定に当たっては、おおむね次の基準に従っている。（1）子ども同士の集団生活から自然発生的に生まれ出た唄で、それが長い年月の間に洗練され、淘汰され、今日まで伝承されて来たもの、（2）発生の年代も、作詞・作曲者も明らかでないが、すべて美しい曲節を遺存し、現在、わらべうたとして比較的、分布圏の広いもの、（3）詞・曲ともに健全且つ優秀な唄で、将来永く国民の文化遺産として保存・育成に堪える古調のもの。したがって、同書に掲載されているわらべうたは、我が国に現存するわらべうたをほとんど網羅したものであるため、地下を取り上げた童謡はなく、往時の子どもにとって地下は遠い存在であったと判断される。

5. 今後の課題

本文では、民話として“県別ふるさとの民話集”、夜話として“甲子夜話”（正篇）を取り上げた。しかし、民話、夜話ともにこの他に多くある。例えば、民話には“日本の民話”（未来社）が肥後・薩摩・大隅篇というように地域別にあり、わらべうたも各篇末に取り上げてある。“日本の昔ばなし（I）～（III）”（岩波文庫）にも目を通す必要がある。

夜話には甲子夜話（続篇）もあり、“江戸時代諸国奇談”（河出書房新社）のような奇談もある。さらには、外国の民話集にも注目しなければならない。著者は、外国の民話集を含めてかなり多くの民話集、夜話、奇談を収集しており、これらに掲載されている地下関係の話を捜し出して、昔人の地下世界を覗いてみたい。

2.1～2.3で述べたが、民話や夜話に出てくる地下世界が現在どうなっているか、現地を訪問したいものである。北海道・小樽市の手宮洞窟、山口県・長門市にある岩穴鬼右衛門の岩穴、福井県・敦賀市の木ノ芽峠と北陸トンネル、新潟県・佐渡の金山など、現在どうなっているであろうか。これらの民話・夜話における世界と現在の状態を比較しながら、往時を偲んでみたい。

6. むすび

民話には多くの示唆が含まれている。自然災害がその一つである。自然災害に関係した民話では、その自然災害の様子や、自然災害に対する心構え、注意、対策などを、住民（子どもを含む）に分かりやすい形で知らせてくれる。したがって、これら自然災害に関する民話を収集し、自然災害科学の立場から分析して、その活用を図ることは重要であり、既に研究が著者らにより進められている¹³⁾⁻¹⁵⁾。

著者はこの、いわば“災害民話学”とでもいうべき、自然災害に関する民話の研究と同様に、地下に関する民話、夜話、童謡（これはそう望めそうにないが）などの研究を、外国のそれらも含めてさらに進めていきたい。その研究成果から、地下への理解や地下の開発、利活用等が一層進展することを切望するものである。

参 考 文 献

- 1) 日本児童文学者協会：ふるさとの民話、全47巻、偕成社、1984.
- 2) 同上第6巻、北海道の民話、pp.139～145.
- 3) 同上、p.221.
- 4) 前出1) 第25巻、山口県の民話、pp.147～152.

- 5) 前出1) 第41巻、福井県の民話、pp. 194～201.
- 6) 松浦静山(中村泰彦・中野三敏校訂)：甲子夜話、1977.
- 7) 松浦静山(中村泰彦・中野三敏校訂)：甲子夜話(続編).
- 8) 前出6)、甲子夜話1、巻四、p. 71.
- 9) 前出6)、甲子夜話1、巻四、p. 64.
- 10) 前出6)、甲子夜話4、巻57.
- 11) 村山 磐：雲仙・普賢岳大噴火～寛政と平成の記録～、東海大学出版会、pp. 76～89、1992.
- 12) 町田嘉章・浅野建二：わらべうた～日本の伝承童謡～、岩波文庫、1962.
- 13) 後藤恵之輔ほか：自然災害に関する民話の収集、分析および活用、第28回自然災害科学総合シンポジウム論文集、pp. 2～17、1991. 10.
- 14) 後藤恵之輔ほか：民話に活かされた自然災害の防止に関する研究～全国のアナケート調査から～、自然災害西部地区部会報・論文集、第16号、pp. 82～87、1993. 3.
- 15) 中田勝康・後藤恵之輔：AHP法による自然災害民話の印象度分析、第15回日本自然災害学会学術講演会講演概要集、pp. 109～110、1996. 11.